

一 編集後記

6月初めに京都大学で Interfaces Against Pollution 2008 が開催されました。これに参加する機会を得たのですが、土壤物理学会を含む30近くのさまざまな学術団体が後援し、土壤物理学会会員からの数多くの発表もありました。この国際会議は、多様な環境問題の解決とコロイド・界面科学の発展のためには、コロイド・界面科学の研究（とくに自然環境、環境保全、環境修復に関連する研究）に従事している工学系、理学系、農学系、薬学系など各分野の研究者、技術者の相互の議論が極めて重要になっているという観点から開かれたものです。

この会議を通して改めて感じたのは、ある対象に対して、いろいろなスケールの目をもつ人がいるということです。自身が圃場スケールという大きな目をもっているために、会議に集まった極めて小さなスケールの目をもっている人々による議論が今更ながら新鮮でした。おおまかには、微生物の目（微生物には目はありませんが）、虫の目、ヒトの目、鳥の目のいずれかをもっている研究者や技術者に分類できるでしょうか。もっと小さな、もっと大きな目をおもちの方や、複数のスケールの目をもつ複眼の方もおられるでしょう。そして、「地球温暖化」を中心に連日メディアでも報道されるようになった環境問題ですが、何が本質的な問題で、何を解決すべきか、どのような方法が有効かなどを明らかにするためには、いろいろなスケールの目で同じ対象を見てみるこ

とが不可欠ではないかと認識させられました。

土壤物理学会は、コロイド、吸着現象を扱う局所スケールから、移流分散現象スケール、圃場内の水・物質収支スケール、さらに流域、地域を扱う広域スケールまで幅の広ささまざまな目をもつ研究者、技術者の集まりとなっており、学会誌「土壤の物理性」もいろいろな目から見た情報が掲載されています。各会員が複数のスケールの目をもつための情報源としても学会誌が機能することを期待したいと思います。

しかしながら、自分が本来もっている（若いときから培った）目というのは、やはりその眼光の輝きが違うと思います。つまり、他の人の論文でいくら勉強したとしても、自分で実験、調査、シミュレーションなどで体験、実感していなければ、それと同じ目を私などは残念ながらもち得ません。したがって、本質的な問題解決やそれぞれのスケールの分野発展のためには、異なるスケールの目をもつ人との交流や共同研究も今後ますます重要になっているものと思われます。学会誌がこうした交流の場、共同研究の成果発表の場になればと思っています。

自分自身として、また、研究集団として、複数のスケールの目で物事を見ることを心がけ、本質的な問題とその解決法を見出していききたいものです。

中村公人（京都大学農学研究科）

土壤物理学会

事務局構成

会 長 筑紫 二郎（九州大学）
副 会 長 井上 光弘（鳥取大学）
庶務幹事 長 裕幸（佐賀大学）
会計幹事 近藤 文義（佐賀大学）
編集幹事 宮本 輝仁（(独)農業・食品産業技術総合研究機構）
会計監査 大坪 政美（九州大学）
" 甲本 達也（佐賀大学）

編集委員会

委 員 長 原口 暢朗（(独)農業・食品産業技術総合研究機構）
委 員 石黒 宗秀（岡山大学）
猪迫 耕二（鳥取大学）
川本 健（埼玉大学）
久保寺秀夫（(独)農業・食品産業技術総合研究機構）
取出 伸夫（三重大学）
中村 公人（京都大学）
坂西 研二（(独)農業環境技術研究所）